

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：46101

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18682

研究課題名（和文）保護者・保育者にとってのわかりやすさを重視した幼児用自尊感情尺度の開発と普及

研究課題名（英文）Development and dissemination of a self-esteem scale for children in early childhood that is easy for parents and childcare providers to use.

研究代表者

勝浦 美和（KATSUURA, Miwa）

四国大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：40735817

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、保護者や保育者が幼児の自尊感情の育ちを気かけ、その姿から養育や保育を振り返る際の指標として他者評価式幼児用自尊感情尺度を開発することを目的とした。

使用者のわかりやすさを重視して保護者や保育者から収集した文言で項目を作成し、因子分析を行った結果、保護者、保育者同一の2因子10項目（第1因子：自己信頼・主体性、第2因子：協調性・達成意欲）の尺度項目が得られた。また、再現性調査、確認的因子分析等により、信頼性と妥当性について確認した。最終年度には、得られた尺度を用いて保育に介入し、応用可能性について探るとともに、自尊感情を育む保育に関する冊子を配布し、本尺度の普及を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの幼児用自尊感情尺度研究では、幼児による自己評価の可否、信頼性と妥当性の確認の不十分さが課題としてあげられていた。本研究では、それらの課題を克服するため、保護者と保育者による他者評価式であり、信頼性と妥当性を確認した幼児用自尊感情尺度を開発した。

本尺度の開発と普及により、保護者や保育者は、毎日の生活や遊びの姿から、幼児の自尊感情の育ちを捉えることが容易になり、養育や保育に役立てることが可能になると考えられる。また、保護者と保育者が同一の項目で読み取った幼児の姿を検討することで、多様な幼児理解や、自尊感情を育むための適切な関わりについて両者が一緒に考えていく手がかりになるだろう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an informant-rated scale for children in early childhood, when parents and childcare providers care about the growth of self-esteem of children and look back on their childcare and childcare based on their behaviors. Easy-to-understand questions were developed based on comments by parents and childcare providers. Factor analysis identified a 2-factor 10-item structure for the scale: self-reliance/independence and cooperativeness/ willingness of achievement. A replicability study and confirmatory factor analysis confirmed that the scale possesses high validity and reliability. In the final year, we intervened in childcare using this scale, explored its applicability, and distributed a booklet on childcare that cultivates self-esteem to spread this scale.

研究分野：幼児教育学

キーワード：幼児用自尊感情尺度 他者評価式自尊感情尺度 保護者 保育者 幼児 自尊感情 省察

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

保育現場では自信がなく、主体的に活動することが苦手な幼児が増えてきたことが報告されており¹⁾、それらは自尊感情の低下と関係しているとの指摘²⁾がある。また、自尊感情は極めて幼い頃の親、あるいは親に代わる養育者との関係で成立する愛情関係を支えとしながら形成されていくことが示されており³⁾、幼児期から保護者や保育者が幼児の自尊感情を育むことに配慮した養育、保育を行うことが重要である。

しかし、現存の幼児用自尊感情尺度は自己評価式が主であるため、幼児自身に自己評価ができるのか否かという問題や、尺度の信頼性と妥当性が十分に検討されていない現状から、保護者や保育者が気軽に利用できる他者評価式幼児用自尊感情尺度の開発が必要であると考えた。

そこで、2016年7月～10月において、保育所、幼稚園、認定こども園に所属する4・5歳児の保護者240人と担任保育者60人に「自尊感情が高いと思われる子どもの姿」について自由記述で回答を求め、得られた547の回答(保護者72人、保育者59人が回答)から保護者と保育者のもつ自尊感情が高い子どものイメージについて検討した。結果として、保護者と保育者には、共通の視点と異なる視点があることが示唆された。

2. 研究の目的

これらの背景をふまえ、本研究では、保護者、保育者が幼児の自尊感情を育むことに配慮した養育、保育を行う際に使用することを見通し、保護者や保育者にとってのわかりやすさを重視した幼児用自尊感情尺度を作成することとした。また、幼児用自尊感情尺度および自尊感情を育む保育方法に関するパンフレットを作成して関係諸機関に配布し、幼児期に自尊感情を育むことに配慮して保育することの大切さを周知することで、幼児期の教育の向上を図ることを目的とした。

なお、本研究における「自尊感情」の定義について、幼児期は「ありのままの自分でよい」と感じることが大切であり、「主体的に物事に関わることができる力に繋がっていく」との考えから「ありのままの自分でよいと感じ、主体的に行動しようとする際の意欲を支える感情」とした。

3. 研究の方法

(1) 仮尺度項目の作成

保育実践での使用を前提とするため、使用者にとってのわかりやすさを重視し、尺度項目の文言は、保護者と保育者の言葉を用いて作成することとした。対象幼児の年齢は、「“自分と他人の区別がはっきりとわかり、自我が形成される時期”であり、“自己主張と他者との協調を学び始める”⁴⁾」4・5歳児とした。

2017年12月～2018年9月には、仮尺度項目作成のため、2016年7月～10月の調査において得られた547の回答をもとに作成した試作版質問紙38項目を用いて、4・5歳児を養育、保育している保護者290人と保育者26人に回答を求めた(「まったくあてはまらない: 1」、「あまりあてはまらない: 2」、「少しあてはまる: 3」、「とてもあてはまる: 4」の4件法)。

(2) 他者評価式幼児用自尊感情尺度(保護者版・保育者版)の作成

2018年10月～12月に、仮尺度項目(保護者版18項目・保育者版21項目)を用いて、4・5歳児を養育、保育する保護者697人、保育者45人(1人につき9～30人の幼児について回答)に対して、予備調査と同様に4件法で回答を求めた。

(3) 信頼性と妥当性の検討

再現性調査

4・5歳児を養育、保育する保護者153人、保育者10人(1人につき10人の幼児について回答)を対象に、他者評価式幼児用自尊感情尺度(保護者版・保育者版、4件法)を用いて再現性調査を行った。実施期間は、保護者は、2019年6月と7月、保育者は、2018年12月と2019年1月である。1回目の実施から約1ヶ月間の間隔において、同一の幼児について2回、同様の調査を行った。

確認的因子分析

2019年6月に行った有効調査データ(保護者145、保育者:379)を用いて、確認的因子分析(SPSS amos Ver.25)によりモデルのデータに対する適合性を評価した。

担任以外の保育者による幼児評定

2019年3月～4月に、本調査に回答した4・5歳児担任保育者の在籍する園で、学年主任などの立場で、該当幼児との関わりが多い担任以外の保育者を対象に、担任外保育者による幼児評定得点と担任保育者の他者評価式幼児用自尊感情得点との関連から基準関連妥当性を検討した。

当該園において、4・5歳児担任保育者が回答した幼児から因子ごとに得点が高かった幼児上位20人を高群、得点が低かった幼児下位20人を低群とした。内訳として、第1因子の高群得点は、24～21(平均値22.85)、低群得点は、16～15(平均値15.55)、第2因子の高群得点は、9～15(平均値13.45)、低群得点は、7～11(平均値9.40)であった。属性は、高群の第1因子が、4歳の男児5人、女子3人、5歳の男児8人、女児4人、第2因子が、4歳の男児3人、女児4人、5歳の男児3人、女児10人、低群の第1因子が、4歳の男児6人、女児2人、5歳の男児6人、女児2人、第2因子が4歳の男児4人、女児3人、5歳の男児12人、女児1人であ

った。

回答者には幼児の得点は知らせず、抽出した高群、低群の幼児をクラス別に名簿順に並べたものを提示し、因子ごとの特徴を表す評定項目（第1因子：何事にも、自信をなくすことなく積極的に取り組もうとする、第2因子：うまくいなくても、人の意見を聞きながら、やりとげようとする）を用いて、該当幼児にその姿が見られるかどうかを「まったくあてはまらない：1」、「ほとんどあてはまらない：2」、「どちらかというにあてはまらない：3」、「どちらかというにあてはまる：4」、「だいたいあてはまる：5」、「とてもあてはまる：6」の6件法で回答を求めた。

（4）保育実践への応用

2019年6月～12月に、他者評価式幼児用自尊感情尺度（保育者版）を用いて保育現場での介入研究を行った。調査対象者は、4歳児と5歳児を担任している保育者9人である。保育者の属性は、20代4人、30代3人、40代2人である。性別は、男性1人、女性8人、経験年数は、5年未満2人、5年～10年6人、10年以上1人、職種は、幼稚園教諭5人、保育教諭5人、担当年限は、4歳児5人、5歳児4人であった。

教育群A、教育群B、対照群の3園を設定した。教育群では、他者評価式幼児用自尊感情尺度と自尊感情を育む保育における留意事項を用いて、6ヶ月間に3回の介入調査を行った。教育群A、Bの主な介入内容は同じであるが、教育群Bでは、年間研修計画を本研究と連動させ、8月と12月に園内研修による事例検討会を実施した。対照群では、教育群と同時期に他者評価式幼児用自尊感情尺度のみを用いた。

なお、全ての研究における倫理的配慮に関しては、四国大学研究倫理審査専門委員会で承認を受けた後、任意参加であること、幼児の特定は行わないことを依頼状に明記し、調査書の提出をもって承諾という形で対象者の同意を得た。

4．研究成果

保護者版については、保護者564人から回答があり、欠損値を除く537の回答を分析対象とした。属性について、年齢は、20代35人、30代321人、40代176人、50代5人であった。性別は、男性25人、女性511人、無回答1人であった。幼児の年齢は4歳児が225人、5歳児が312人、性別は、男児が272人、女児が265人であった。仮尺度18項目のうち、天井効果を示した項目はなかったため、予備調査と同様に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転・2因子：SPSS Statistics ver.24）を行った。

男女別のパターン行列をもとに分析し、男女ともに因子負荷量が.50以上、因子間の差が.20以上を基準として、それに満たない7項目を削除した。その結果、2因子11項目（第1因子：自己信頼・主体性7項目、第2因子：協調性・達成意欲4項目）が得られた。

保育者版については、保育者44人から幼児524人分の回答があり、欠損値を除く505の回答を分析対象とした。属性について、年齢は、20代15人、30代18人、40代10人、50代1人で、性別は、男性3人、女性41人であった。職種は、幼稚園教諭20人、保育士13人、保育教諭11人、保育経験年数は、5年未満7人、5年～10年17人、10年以上20人であり、4歳児担任22人、5歳児担任21人、混合クラス担任1人であった。なお、保育者が回答した幼児の属性は、4歳児247人、5歳児258人、男児258人、女児247人であった。仮尺度21項目のうち、天井効果を示した4項目を削除した後に、予備調査と同様に探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転・2因子：SPSS Statistics ver.24）を行った。

男女別のパターン行列をもとに分析し、男女ともに因子負荷量が.50以上、因子間の差が.20以上を基準として、それに満たない3項目を削除した。その結果、2因子14項目（第1因子：自己信頼・主体性9項目、第2因子：協調性・達成意欲5項目）が得られた。

項目内容の決定に際し、研究者7人（心理系5人、幼児教育系2人）で協議し、両尺度の比較を行った。その結果、第1因子（保護者7項目、保育者9項目）のうち6項目、第2因子（保護者4項目、保育者5項目）のうち4項目が同一であった。尺度開発の中で、保護者と保育者では、専門的知識の有無や他児との比較の可否から、幼児の姿の読み取りが異なることが予想されていたため、他者評価式幼児用自尊感情尺度項目は保護者版と保育者版で異なる可能性があったが、予備調査、本調査で明らかになった通り、得られた項目内容の多くが共通していた。そこで、今後、保護者と保育者が本尺度を用いて共に幼児の自尊感情の育ちについて話し合うことを想定し、保護者、保育者ともに共通であった項目を採用し、2因子10項目（第1因子：自己信頼・主体性6項目、第2因子：協調性・達成意欲4項目）とした。他者評価式幼児用自尊感情尺度の項目の平均値、標準偏差およびcronbachの係数と因子負荷量は表1、表2の通りである。

表1 他者評価式自尊感情尺度項目の平均値、標準偏差、係数(保護者n=537、保育者n=505)

	.自己信頼・主体性		.協調性・達成意欲		全体：自尊感情	
	保護者	保育者	保護者	保育者	保護者	保育者
平均値	16.81	17.33	11.52	11.97	28.32	29.3
標準偏差	3.28	3.93	2.31	2.6	4.46	5.28
係数	.81	.87	.74	.80	.78	.84

表2 他者評価式幼児用自尊感情尺度項目の因子負荷量

項目内容	保護者		保育者			
	共通性	共通性	共通性	共通性		
・自己信頼・主体性						
大勢の前でも、積極的に発言する。	.74	-.13	.50	.83	-.12	.63
自分に自信をもって様々なことに取り組もうとする。	.63	.17	.48	.74	.13	.62
周りの意見に流されず、自分の考えで行動できる。	.55	.03	.31	.68	-.08	.44
初めてのことや人にも自分から積極的に関わる。	.74	-.15	.51	.81	-.06	.63
嫌なことや困ったことを相手にきちんと伝えることができる。	.55	.08	.34	.67	.05	.48
自分の思いを素直に表現できる。	.61	.13	.43	.66	.05	.47
・協調性・達成意欲						
時間がかかっていても途中であきらめず最後までやりとげる。	.11	.54	.33	.11	.69	.53
人の話をよく聞くことができる。	-.18	.76	.53	-.14	.77	.54
友達の意見を聞き受け入れたり、友達の意見を取り入れて新しいアイデアを出したりする。	.10	.64	.46	.24	.63	.54
思い通りにならないことがあっても気持ちに折り合いをつけて、次の行動に移すことができる。	.02	.66	.45	-.13	.75	.51
因子寄与率 (%)	29.16	43.35	37.5	53.94		
因子 との相関		.25		.33		

他者評価式幼児用自尊感情尺度の係数は、保護者版が、第1因子 .81, 第2因子 .74, 尺度全体 .78, 保育者が、第1因子 .87, 第2因子 .80, 尺度全体 .84 であり、十分な内的整合性が確認された。

また、再現性調査については、保護者 146 人(有効回答 133), 保育者 10 人(有効回答幼児 98) から回答があり、1 回目と 2 回目の回答の平均値に大きな変化はなく(表 3), 相関では、保護者版が、第1因子 .82, 第2因子 .74, 尺度全体 .82, 保育者版が第1因子 .72, 第2因子 .65, 尺度全体 .68 であり(表 4), 正の相関があることが示された。

これらの結果から、再検査信頼性係数は十分な値を示しており、本尺度の安定性が確認された。

表3 再現性調査における各因子の平均値、標準偏差(保護者n=133, 保育者n=98)

	自己信頼・主体性		協調性・達成意欲				全体：自尊感情					
	保護者	保育者	保護者	保育者	保護者	保育者	保護者	保育者	保護者	保育者		
	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目		
平均値	16.54	16.39	17.66	17.80	11.35	11.23	12.38	12.42	27.90	27.62	30.04	30.21
標準偏差	3.17	3.41	4.32	4.23	2.06	2.23	3.10	3.06	4.29	4.72	5.70	5.71

表4 再現性調査における各因子間の相関

	保護者			保育者		
	(2回目)	(2回目)	全体(2回目)	(2回目)	(2回目)	全体(2回目)
自己信頼・主体性(1回目)	.82**	.03	.55**	.72**	.03	.55**
協調性・達成意欲(1回目)	.18	.74**	.48**	.18	.65**	.48**
全体：自尊感情(1回目)	.64**	.38**	.82**	.64**	.38**	.68**

**p<.01.

次に、確認的因子分析(SPSS amos Ver.25)によりモデルのデータに対する適合性を評価した。モデルの適合性の評価には、GFI(Goodness of Fit Index), CFI(Comparative Fit Index), RMSEA(Root Mean Square Error of approximation)を用いた。

保護者版は、GFI .93, CFI .92, RMSEA .08 と適合度は許容範囲内であった。保育者版は、GFI .96, CFI .98, RMSEA .07 の値が得られ、GFI, CFI については、適合条件が十分に満たされていると言える。RMSEA については、許容範囲内であると言え、保護者版、保育者版ともに、このモデルが妥当であることが示された。

さらに、保育者版において、担任以外の保育者による幼児評定を行った。第1因子(自己信頼・主体性)の保育者評定における高群と低群の平均値(標準偏差)は、それぞれ 4.30(1.26)と 2.80(.89)であり、有意差が見られた($t(38)=4.34, p<.001$)。また、第2因子(協調性・達成意欲)の保育者評定における高群と低群の平均値(標準偏差)は、それぞれ 4.65(.86)と 3.10(1.02)であり、こちらも有意差が見られた($t(38)=5.16, p<.001$)。

これらの結果から、各因子における担任保育者による他者評価式幼児用自尊感情尺度評定高群は、担任外保育者による保育者評定が高く、低群は、保育者評定が低いことが示されたため、本尺度の基準関連妥当性を確認することができたと考えられる。

そして、作成した他者評価式幼児用自尊感情尺度(保育者版)を用いて保育現場で介入研究を行った。保育者 9 人が回答した他者評価式幼児用自尊感情尺度使用対象の幼児は、4 歳の男児 51 人、女児 56 人、5 歳の男児 61 人、女児 52 人である。

教育群 A では、全体で 1 回目から 3 回目にかけて点数が高くなったことが確認された。また、

教育群Bでは、各因子で2回目から3回目に点数が高くなっていた。対して、対照群は3園の中では、一番得点の変化が少なかった。これらのことから、定期的な保育介入には、ある一定の効果があることが推察される。また、今回の調査を通して、3園ではあったが、介入の有無に関わらず、幼児期の自尊感情は、時期とともに高まっていくことが示唆された。

本研究では、現存の幼児用自尊感情尺度の課題であった幼児自身に自己評価ができるのか否かという問題や、尺度の信頼性と妥当性が十分に検討されていない現状を鑑み、保護者、保育者にとってのわかりやすさを重視した他者評価式幼児用自尊感情尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討した。

本尺度は2因子10項目で構成されており、保護者および保育者自身が語った具体的な幼児の姿を尺度項目として使用したため、わかりやすいものとなったと考えられる。また、項目が精選されたことで、所要時間も短く、多忙な保育現場の実情に見合うものとなった。

しかし、他者評価式であるため、評価者の見方や考え方によって評価が恣意的になる可能性があること、保護者版の妥当性が検討されていないことが問題点としてあげられる。

これらのことをふまえ、使用に関しては保育者を主とし、数値の高低にとらわれることなく、得られた幼児の姿を重視しながら省察の一つの資料として扱うこと、個人面談等で保護者版を併用し、多面的な幼児理解に繋げる一方策とすることが望まれる。

本研究の成果物として、幼児用自尊感情尺度および自尊感情を育む保育方法に関するパンフレットを作成し、関係諸機関約130箇所に配布した。今後は、保育現場と連携しながら、本尺度の有効な使用方法について探っていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 勝浦美和, 子どもの発達と保育者の役割, やさしく学ぶ保育の心理学, ナカニシヤ出版, 2016, 129-137.
- 2) 古荘純一, 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか, 児童精神科医の現場報告, 2009, 光文社
- 3) 近藤卓, 生きる力を支える自尊感情, 児童心理 7月号, 2007, 43-47
- 4) 厚生労働省, 保育所保育指針解説, 2008, フレーベル館,

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 勝浦 美和	4. 巻 36 (1)
2. 論文標題 保護者と保育者がもつ自尊感情が高い子どもイメージ-「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との比較を通して-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 応用教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝浦美和	4. 巻 第51号
2. 論文標題 幼児を対象とした自尊感情尺度の開発に向けて - 自尊感情の定義と幼児用自尊感情尺度に関する文献の検討 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 四国大学紀要人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勝浦 美和	4. 巻 8
2. 論文標題 保育者のもつ自尊感情イメージの構造-保育態度との関連-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子育て研究	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 勝浦 美和
2. 発表標題 他者評価式幼児用自尊感情尺度の保育実践への応用可能性-園内研修における取り組みから-
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 勝浦美和
2. 発表標題 幼児用自尊感情尺度の開発
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 勝浦美和
2. 発表標題 幼児用自尊感情尺度の開発-他者評価式幼児用自尊感情尺度開発における予備調査から-
3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 勝浦 美和 浜崎 隆司
2. 発表標題 幼児を対象とした自尊感情尺度の開発に向けてー保護者と保育者がもつ「自尊感情が高い子どもイメージ」の比較ー
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

冊子「自尊感情を育む保育について」2020

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	浜崎 隆司 (HAMAZAKI Takashi) (20218530)	鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (16102)	